活動報告書

氏名：田辺裕子
活動拠点：パリ
活動期間：2025年 9月

■ プロジェクト名

壁のなかとそと：「アート的なもの」の所在と仕掛けを探す

■ プロフィール

田辺裕子（たなべひろこ）
1993年生まれ。東京を拠点に活動。英文学や戯曲分析を学んだのち、企業財団による芸術文化活動に従事。2020年から、仕事の傍ら「ラボラトリ文鳥」の名前で地域コミュニティや学校現場での探究活動を展開。上池袋で「文鳥コテージ」というコミュニティスペースを運営し、様々なテーマで研究会や展示を企画する。異なる立場の人々が対話する機会を作りながら、「演劇」を正常と異常の二項対立を異化し組み換える仕掛けとして捉え、実践的に探究している。

■ 主なインタビュー

・イペールヴォワザン（パリ14区で展開されている地域共助の取り組み）
・アダマン号（セーヌ川にあるデイケア施設）
・フルーリ・メロジス刑務所におけるリール・セ・ヴィーヴルという団体の活動（刑務所図書館運営）

そのほか、サンタンヌ精神病院美術館なども訪問したが、以下では、インタビュー内容に絞って報告をまとめる。

■ 報告

リサーチテーマ

近代の監視装置である監獄、病院、また学校において、近年「ケア」や「コミュニケーション」が重要視されはじめ、美術や演劇がワークショップのかたちで実践の役割を担っている。アート的なもの（美術や演劇の作品単位にとどまらないあらゆる創造的な身振り）が、病院や刑務所といった近代の監視制度に入り込むとき、どんな役割を担うのだろうか。これらの実践は、内面化された規律意識を異化することもあれば、権力や政治の影をウォッシュして、より一層強固に内面化させるように方向づけることもあるだろう。病院や刑務所が、その「隔離」の役割を弱め、地域コミュニティと関係を構築していくとき、それはどのように模索されるべきなのか。このリサーチプロジェクトでは、精神保健福祉施設や刑務所にかかわる文化芸術活動について、フランス・パリでの実践の現場を見学し、異なる立場の人々が、現状とは異なる可能性を想像し、再検討できる機会を創出する方法について考察する。

キーワード

コミュニケーション、遭遇の創出、交流の予兆がある空間づくり、監視/見守り、表現の方法を探る猶予を持つこと、ヒエラルキーの異化、

イペールヴォワザン Hyper Voisins

パリ14区で展開されている地域共助の取り組みについて、その仕掛け人のPatrick Bernard氏にインタビューをさせていただき、来週末開催予定のランチイベントに向けたポスターの掲示活動に参加した。

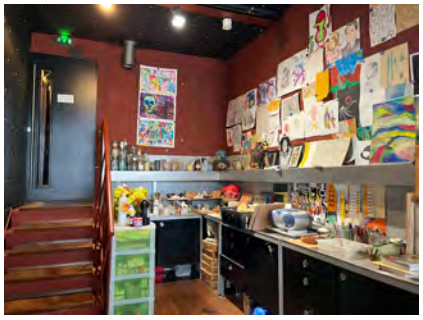
Bernard氏は、ジャーナリストとして25年勤めたのち、「コンヴィヴィアリティ」をキー概念として掲げ、地域コミュニティの創出を目指した社会実験を2017年に開始した。具体的には、路上にテーブルを並べたランチ会などの集会型のイベントや、SNS上の50以上のグループでの情報共有や相談のやりとりが行われている。活動の範囲は、「道」で言えば53、住人の数だと15,000人を対象とし、活動の参加者は3,000人前後である。Bernard氏によれば、活動規模には適切なレベルがあるという。イベントで会ったり、不要な家具を譲ったりしたことで生まれたファーストコンタクトののち、パン屋や路上で偶然会うといったセカンドコンタクトによって関係構築が進むことがポイントである。そういった遭遇が繰り返し発生するような地域へと成熟していくことに意味があるので、イベントひとつひとつはその「ツール」に過ぎない。現在、パリのほかの地域でも同様の取り組みが展開できるか、そのメソッド化を目指しているとのことだった。Bernard氏の関心が具体的な住民とのやりとりだけでなく社会の仕組みの設計（ソーシャル・デザイン、ソーシャル・エンジニアリング）に注がれていること、そしてそのために必要不可欠なこととして政治的分断を避け「ポジティブであること」を共有するべき価値観としていることが印象的だった。





アダマン号 L’Adamant

セーヌ川にあるこのデイケア施設は、ドキュメンタリー映画『アダマン号に乗って』（2023年）で話題になった。パリの1区〜4区の住民を対象とする公的な施設だが、精神疾患を抱える人々の自主性を重んじるデイケア施設として特別に設計されたところが特徴的だ。月曜から金曜まで時間割があり、映画鑑賞の時間や創作の時間、また時勢について話す時間などが用意されており、さまざまな方法で自分らしさを表現し、うまく言い表せない不安についても向き合う助けとなるようになっている。また、職員たちは白衣や名札などの権威の印を身につけてはいない。今回インタビューをさせていただいた、職員のWalid Benziane氏によると、アダマン号での活動の成果のひとつは、当事者と職員が共同で結成するassociationによって、施設内でコーヒーなどを販売しているところだという。このような主体的な活動の自由を確保することは、病院に所属するかたちで運営されるデイケア施設にとっては簡単なことではなく、他の区からも問い合わせが多くあったが、どの施設でも簡単にできるわけではない。Benziane氏は、第二次世界大戦後に提唱されたpsychothérapie institutionnelleという考え方に言及しながら、「病」は病人だけでなく、硬直した病院運営など、「健常」な社会のなかにも存在するという視点を持つことが重要で、診断や立場を超えて共に取り組むべき課題として「病」をとらえる必要があると話してくれた。


リール・セ・ヴィーヴル　Lire, c'est vivre

フルーリ・メロジス刑務所にある図書室は、リール・セ・ヴィーヴルという団体によって運営されている。今回、所内にあるオフィス及び図書室を実際に訪れることができた。複数の棟から成る、この欧州最大の刑務所には、全部で11の図書室がある。1980年代後半、それまでボランティア活動だった図書活動について、体制整備が行われた。受刑者のうち、45%ほどが図書室に利用登録しており、決まった時間割のなかの特定の時間、90分ほど図書室で過ごせることになっている。選書に厳しい検閲はなく、SFや詩集、短編集、漫画、探偵もの、科学本など幅広く、刑務所について書かれたものや、フランス語以外の書籍も所蔵されている。インタビューをさせていただいたElliot Rambach氏によれば、本団体のミッションは本を手にする権利を確保することにある（読書によって更生させるといった指導や治療などの「方針づけ」ではない）。職員4〜6名、ボランティア20名がおり、予算のなかで新しい書籍を購入するだけでなく、寄付された書籍の管理、そして毎週月曜日に読書会を開催し、司書資格のコースも実施している。こういった機会の充実した提供は本団体だけに限ったことではなく、刑務所内では、運転免許の筆記試験の受験や、いくつかの専門的な授業の履修が可能である。また、本団体のほかに自治体の文化部門がアートのワークショップやコンサートを企画したり、教誨師や社会復帰支援のスタッフがそれぞれの専門において支援活動をしている。しかし、生涯学習の選択肢の豊かさとは裏腹に、収容人数は180%と、オーバーキャパシティの状況は深刻な問題となっている。図書室利用を希望するひとは監視員によって部屋から図書室まで案内されるルールだが、案内が行き届かず、来室が叶わないこともあるのも現状だ。地味な活動でその意義が評価されにくく厳しい現実もあるようだったが、面会で実子に読み聞かせをするために絵本を借りるひとがいるといったエピソードからは、刑務所図書室の活動が、壁の内と外の精神的な往来の道筋となっていることがわかった。

帰国して

短い滞在ではあったが、これまでの関心と実践を大きな視野で捉え直すきっかけを得た、意義深い旅となった。とりわけ、「文鳥コテージ」で地域の活動に挑戦し始めた頃がちょうどコロナ禍の始まりと同時期だったことを振り返ると、足元を見つめて試行錯誤した数年を経て、いまやっと顔をあげ、自分のローカルな活動と遠く離れたローカルな活動と紐づけることでエンパワーされ、純粋な喜びを感じた。

今回の訪問をふまえて、活動拠点である東京・上池袋では、いくつかのトピックを設定し、展示と対話の場を企画したいと考えている。支援・表現・研究の活動に従事するゲストスピーカーを迎え、自分たちがが担うことのできる役割の模索もさることながら、アートや言葉による表現や研究が、実際の支援の現場にどのように寄与しうるのか、両者の関係を共に考える輪を描いていきたい。

今回、貴重な機会をくださったインタビュイーのみなさま、ご支援くださったThe BARのみなさまに心より御礼申し上げます。